三角畠の乱

小野三郎

この乱は応永三二年（一四二五）九月十三日、大友家十一代親著（ちかつぐ）の嫡男孝親が十二代持直に対して起こした乱である。

南北朝時代、大友家は北朝方の主要な戦力として戦い続け領地や勢力を拡張してきた。しかし、南朝方が優勢な九州の中で北朝方の大友家は厳しい状況にあった。二つの強者が対立する戦いではどちらかに組み込まれ中立は許されない。九代氏継（うじつぐ）は家臣の統率と南朝方への対応に苦慮していた。氏継は大友家の生き残りと安泰を思い突如優勢な南朝方へ転向し、わずか四年で家督を十代親世へ譲った（一三六八年）。このときから約七〇年間大友家は氏継系と親世系が交互に家督を継ぐ両統交立の慣習が成立した。

この慣習により孝親は嫡男に生まれながら大友家の家督を継げなかった。この不満から反乱を起こしたが失敗し三二歳の若さで三角畠において敗死した。

三角畠はどこにあったかを確定する資料がない。この乱に関して江戸時代に書かれた本によると孝親が敗死したとされる場所や日時が複数伝えられている。場所として肥後国三角畠・州大分郡三角畠・三角畠等があるが、どこであるかは特定されていない。日時は、応永三二年九月十三日・応永三三年十一月二九日等が伝えられている。

古国府説

大分市古国府に「タカチカ」の小字があり、近くに孝親様の祠と称される祠がある。寛政年間（一七九〇年代）近くの畑から多数の人骨が出土している。このことから古国府に孝親の館があり、多数の人骨は孝親が十二代持直に誘い出されて誅殺されたときのものと言われている。（稚城雑誌）

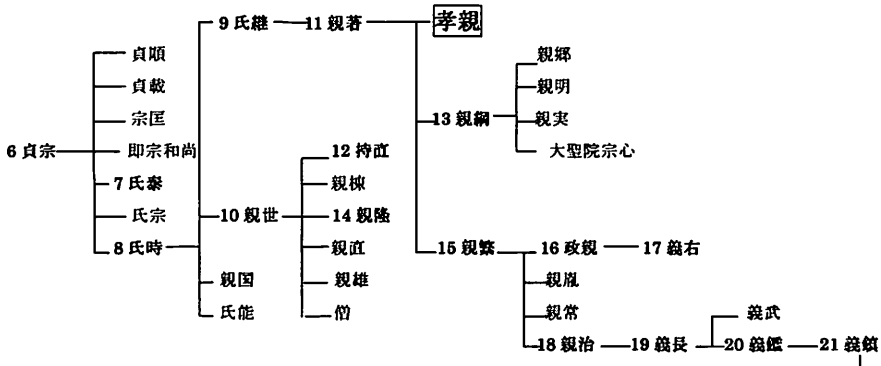
古野説

事件のあった室町初期の頃は古国府を含めた大分市は「府内」「府中」と呼称されていた。三角畠が古国府のどこかにあったなら「府内（府中）古国府」と書かれていたはずである。しかし大分郡三角畠と書かれていることから三角畠は挟間町古野と推定される（梅野敏明氏）。古野地区は十数年前から新しい道路の開通や宅地造成で土地の様相の変貌が激しい。また昔を知る人も少なく「ミスミ畠」の地は特定できない。しかし、古野四二の一番地（水田・後藤幸雄氏）の東の隅に反乱を起こして憤死した孝親に関わりがあるらしい室町時代初期の小さな石の塔（橋本操六氏）が祀られている。塔は水田の中央の塚（径約二m・高約一m）の上に祀られていた。塚の草切りの際は手を伸ばせば上まで届いたそうである。平成二四年に水田は整備され塚は取り払われ塔は現在の位置に移された。塚からの出土品はなかった。この南に経塚と呼ばれる塚があった。

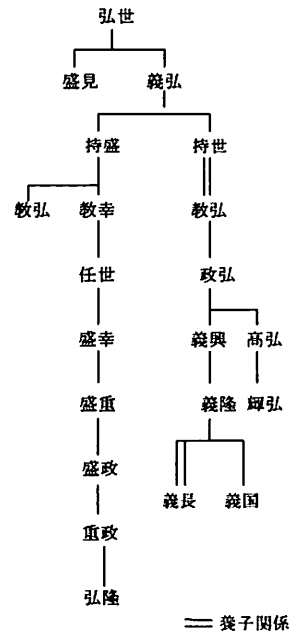
挟間の領主の変遷

挟間北方は一三〇〇年頃から大友惣領家が支配し、挟間南方は挟間氏の所領であった。乱があった一四二五年は孝親が挟間南北の

南北朝期以後の大友氏略系図（大分県の歴史）



大内氏略系図



当　主	譲受年	在任期間	没年	豊　後	筑　後
9　氏継	1364	4	1400	安堵　譲り　没収	安堵　譲り　没収
10　親世	1368	33+(15)	1418	安堵　先例に任す	
11　親著	1401	(15)+7	1426	補任（15年後）	補任
12　持直	1423	9	1445	補任	補任
13　親綱	1432	7	1451	保有獲得経緯不明	
14　親隆	1439	5	1465	安堵　譲り	
15　親繁	1444	18	1493	継承	補任
16　政親	1462	22	1496	安堵	安堵　譲り当初半国

領主であったらしいことが柞原八幡宮文書から推量される。孝親の所領になった経緯は次のように考えられる。十代親世は家督を一四〇一年十一代親著へ譲渡した。このとき両統交立の慣習で十二代は十代親世の嫡男持直に決まり、十一代親著の嫡男孝親は後継者から外された。親著は家督を継げない孝親を不憫に思い大友家所領の中から狭間南北を孝親に宛がった。（狭間氏の南方と引き換えに豊前の領地を与え南方を召し上げ北方と合わせて孝親に与えた。挾間史談三号）

この狭間南北は一四二九年から一四三九年の時点では十二代持直の弟の親雄の所領になっている。これは親著から宛がわれた狭間村は孝親が反乱に失敗し十二代持直に没収された。持直は没収した狭間南北を何らかの理由で弟の親雄に与えたと考えられる。

反乱の背景

室町時代（一四〇〇年代）に入ると農村の自治がすすみ、年貢の銭納も始まった。地方では非御家人が力を付け、旧いしきたりに抵抗する悪党と呼ばれる者が活動する等武士階級にも新しい動きが出てきた。下剋上や土一揆が起こり社会の秩序がゆらいできた。各地で家督や所領をめぐる一族間の争いが頻発した。反乱は世の中が騒がしくなり社会の枠がゆるみ始めたなかで起こされた。反乱の計画は各人各様の思惑が絡み合ってすすめられた。

一、藩主への望みを断たれた孝親の無念は直接には持直および事あるごとに勢力を誇示する戸次氏に向けられた。孝親の無念の底には両統交立への不満があったと思われる。

二、徐々に実力を付けてきた入田氏や巧網氏等は反乱を勢力伸長の機会ととらえ、孝親の心情や性格を承知の上で孝親の下（もと）に集まった。

三、そこに、常に大友氏と利害関係が衝突する大内氏が大友家の弱体化をねらって謀反に関与した。

四、守護大名の強大化を望まない幕府の思惑がはたらいた。

大内氏の関与

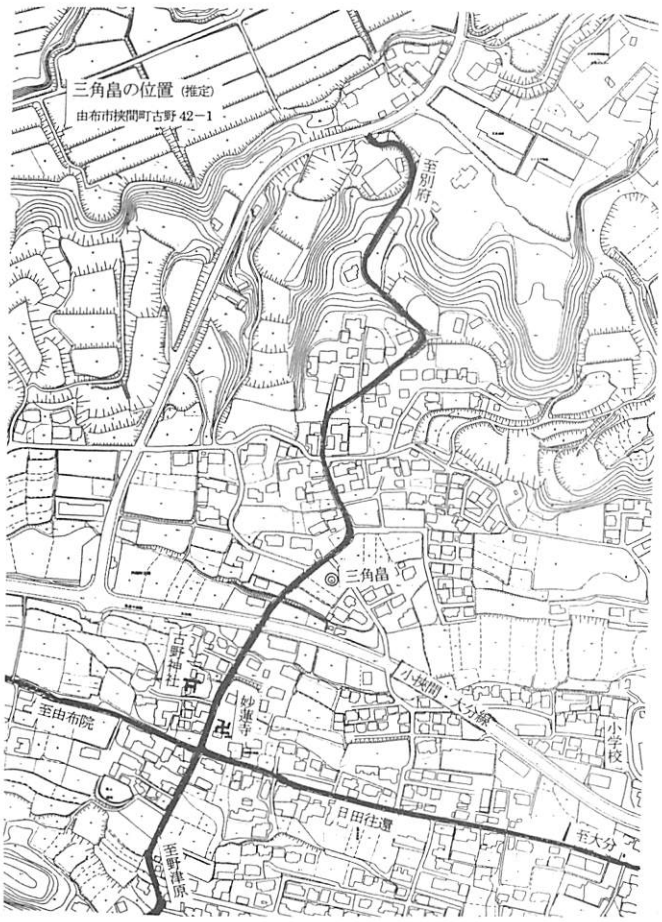
孝親は無念や不満に耐えられず乱れた生活をしていた。粗暴な言動が多く領民に嫌われていたと伝えられている。反乱には求心力、組織力、計画力等々の高度な諸能力が求められる。しかし、孝親には謀反を起こす力量に不安があった。そこへ孝親の弱点を知る大内盛見（もりはる）が介入してきた。反乱が失敗すれば大友家家臣は厳しい追討を免れない。しかし孝親の謀反が失敗しても大内氏は無傷である。大内氏は持直が盛見に対してどう動くか持直の出方を試していたのであろう。

盛見が事件の十日前から上毛郡鈴隈（中津のすぐ北）に留まり反乱の収束を祈願して宇佐神宮へ神馬を献上している。このとき、孝親と盛見は通じていたであろう。盛見は九月十三日の反乱失敗の日にただちに引き揚げている。偶然の一致とは思われない。当時、情報はどんな手段で伝えられていたのであろうか。おそらく盛見は決行の日を知っていたのであろう。また、事件の後孝親の弟の十三代親綱は若いとき藩主を辞退して大内氏支配の豊前に身を隠している。一時的であっても大内氏の黙認か了承なくして豊前への逃避はできない。大内氏が常に大友氏の動きを注視しながら対応していたことがわかる。

狭間の地理的優位性

謀反の計画は秘密裏にすすめなければならない。情報交換や会合で人が動けば秘密は漏れやすい。守護所に近い古国府より上野から離れた狭間の方が秘密の保持性は高い。しかも狭間は東西南北に通ずる道が交差する。家臣や大内氏等広範囲からの情報や人の集散の場所として狭間の方が府内より諸条件がよい。

古野を通る朴木線（日田往還）は大分と大宰府を結ぶ古代の官道と重なる。南北朝期の懐良（かねなが）親王の大軍（一三五五～七一）は日田往



還を通って大分へ攻め入っている。南は野津原を通って久住、竹田へ通じ、北は高崎山の裏を通り別府、中津に通じている。一三三〇年頃狭間氏は院内（豊前）御沓村の地頭であった。約百年の時を経ても院内と狭間をつなぐ情報伝達のルートや方法は機能していたであろう。一四三二年狭間氏の二百騎が親雄とともに規矩郡（北九州小倉）で大内氏と戦っている。狭間と豊前の繋がりが推察できる。

孝親の敗死

戸次采女正（持直の母は戸次直光の娘）は少数の家来を伴い孝親の異常な言動を諫めに狭間の孝親の館を訪れる。説得は不調に終わり、戸次氏は再訪を期して館を辞し帰路につく。三角畠まで来たとき采女正は孝親に襲われ死去する。その場へ親著が来合わせ親子が争い親著は負傷する。孝親は父親を殺害したと思い込み切腹する。（豊後大友物語・挾間久）

面談の様子を急ぎ持直に報告するため戸次氏が選んだ帰路は狭間と上野を結ぶ安全で最短な道であった。三角畠はこの道筋にあった。上野と三角畠を結ぶ延長の先は北方か向原辺りになる。

人の動きやすさと秘密保持は古国府より狭間の方がすぐれている。おそらく反乱の計画は孝親の所領の狭間の向原辺りで練られ、孝親憤死の地は古野の三角畠であろう。

孝親が戦乱の世に生きていれば名誉ある死があったかも知れない。しかし、領地の取り合いが一時収まった時代の孝親は大友家存続のための枠組みの中の生き方を強いられた。そこへ大内氏や幕府の大友氏弱体化への思惑がはたらいた。台頭してきた家臣たちも持直派に力及ばず孝親は非運の死を遂げる。孝親は大友家存続の両統交立制度が定着するときの犠牲者とも言える。

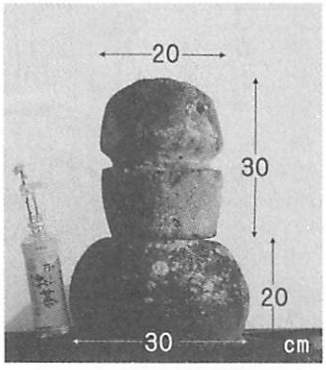
その後の大友氏

持直は乱の関係者を厳しく追及するとともに勢力を拡大する。博多では貿易の権益をめぐり、筑前では領地をめぐって盛見と鋭く対立し、ついに盛見を自刃に追い込む。幕府は守護の盛見を殺害した持直を幕府への反抗とみなし、十三代親綱、十四代親隆に持直の追討を命ずる。持直は各地を転戦しながら善戦を続けたが姫岳（臼杵市と津久見市の境界）の戦いで家臣の裏切りにより敗れる。

十三代親綱は七年間、十四代親隆は五年間と在任期間が短い。少し遡ると親著の補任と安堵は家督の譲渡を受けて十五年後であった。安堵の遅れや在任期間が短いのは大友家の内部事情もあったであろうが守護大名の強大化をはばみたい幕府の干渉があったと思われる。十五代親繁になって約七〇年間続いた氏継系と親世系の両統交立の流れは終わり、慣例に反して惣領家の制に戻る。

参考図書

挾間町誌　挾間史談誌　同会研究報告書　橋本操六
挾間　久　渡辺澄夫
右記各誌・各氏の関連事項を参考



三角畠の塔
所在地　由布市挾間町古野42-1
管理者　後藤　幸雄